

《 保育者養成における絵本のもつ可能性・・・保育者・子ども・保護者・・・ 》

開催地福山市立大学で「子どもの最善の利益とは」という大会テーマのもと、絵本部会では、将来、この重要なテーマを念頭にいれ実践できる保育者や保護者が育つために、保育者養成校で学生と共に学びの多い教育をどのようにしたらよいかを、絵本に焦点を当て、シンポジウムで考えてみることにしました。

現在の保育者養成校では、絵本は発達に不可欠な存在とされ、保育者はそれを活用し発達支援を行う専門家でなくてはならないとされていますが、その実態に切り込んだ研究は少ないのではないのでしょうか。

「保育者養成校シラバスにみる絵本」(上田智子氏)は保育士養成協議会メンバー校のうち2018年度開講科目シラバスから203授業の分析を試み、幼稚園教育要領や保育所保育指針などと照らし合わせて考察を深め、絵本を保育に展開する力、良質で適切な絵本を選択する力の養成が求められると提起しました。

「子ども理解と絵本」(高橋かほる氏)では現場の保育および養成校での教育経験を踏まえ、急激な社会変化の中での認知能力および非認知能力の育ち、また絵本への反応の違いから3・4・5歳児の発達を読み取ること、絵本の中にストレスとレジリエンスを共に子どもは求めていることなど、絵本の読み聞かせ(読み語り)の具体例と関係づけて話されました。

独立した科目として絵本の読み合い授業を続けてきた報告「絵本のワンダー」(宮地敏子)では、絵本を読んでもらい、読み合うことで培われる力は、自己発見を促し、人と人を繋ぎ、さらに見えないものを可視化するワンダーであるとししました。

コメンテーターの山岡テイ氏が海外多文化社会の保育の絵本活用の写真を多数提示して自己肯定感、自他共生などの育ちを促す絵本の活用を補足なさいました。

本大会実行委員長で絵本部会会員の劉郷英氏のご尽力により、中国からの参加者が増え、通訳に恵まれ、質問も活発になされ、絵本への関心の高まりを感じました。

山田千明コーディネーターのこのシンポジウム報告が、会報に掲載されます。ご高覧下さい。

付言すれば、福山市には公営の「えほんの国」がショッピングモールの一つの階全体を利用して運営されています。

さて、次回の学会はハワイで2019年8月9日10日に開催が予定されています。多文化社会での学会です。絵本部会では何を企画するのでしょうか。国境を超えて、長年読み継がれている絵本の魅力を探るのもおもしろそうだという意見が出ています。

どうぞ40回ハワイ大会に奮ってご参加ください。